

幕末明治の写真師列伝 第百五回 宮下欽 その二十七

「第一月廿六日

一、第八字半宮下兼而内田氏と約束之通、右同氏へ行、写真[并枚数と代附]持参致し事務局へ行、第十一時過帰ル、中島屋方小盤紙一束、山田屋方前掛地切 到来ス、夜ニ入内田氏方午後夜第九時ニ来リ呉候趣由来ル、右ニ付八時半頃宮下、内田氏へ行候所、今日差出候写真枚数千部と書出候所、二百部御入用之旨由来ル、且明朝罷出候様[連名ニ而]同局方由来ル、

「第一月廿七日

一、第八字半宮下、内[田]氏へ行、夫方一同ニ事務局へ行候所、今度申付置候写真、二百部之外ハ先見合候旨御座候へ共故、最早凡四百部斗拵候間、右ニ而ハ迷惑ニ候旨申出候所、元来西洋人に註文致し候へ者、七拾枚ブツクニ張上ケ四ドルニ而差出候旨ニ付右直(値)段ニ致し度旨、兼而申出候義も有之旨被申聞口候得故、いつれにも松三郎留主之義ニ付、帰国致し候ハ、申談致而委細之義可申上旨と申引取第十二時頃帰ル、午後第七時頃先生富岡方御帰宅、

「第一月廿八日

一、第九字頃先生事務局へ御出、第十一時頃御帰り、午後第三時頃宮下事務局方兼而御頼之北海道写真二拾四枚、台紙ニ張上ケ持参致し候所、最早御役人衆不残引取候旨ニ付、取扱町田氏ニ付、同氏住居西の窪へ行、取次を以テ差出シ第五時前帰ル、宮部信兵へより新鮭十五本・同はらの子一樽到来ス、午後第五時頃先生内田氏へ御出、同第七時頃御帰り、

「第一月三十一日

一、第九時頃津田氏帰宅ス、午後第五時半過帰リ来ル、川村氏宮下第十一字頃帰宅、宮下同時私用ニ而外出シ、午後第七時半頃帰ル、

「第二月二日 晴

一、第九字過宮下事務局へ行、富岡生糸製造所之写真種板三枚持参シ、午後第三時頃帰ル、三戸氏第七時半頃来リ、終日手伝シ午後第八時頃小石川へ帰ル、五時過多兵衛方硝子砂摺致し候代金払遺ス、

「第二月十二日 晴午後曇

一、第十字過宮下、瓦町内田氏へ行、事務局へ差出へき再写之元画五葉借用し、午後第十一時前帰ル、おてふ殿伝馬町かり豆や方駿河台蛭子氏迄御出第十二時前御出、午後第五時頃御帰り、今日箱館へ味甘四箱并四ツ立写真三枚・双眼紙写真八枚・同反対三枚且兼而御註文之子供上下一具、苳豆やニ止宿致し居候、

「二月同十四日

一、第十一時前頃先生御外出御帰り、午後第三時頃御帰り、バランス并瀬戸漏斗四ツ御求御帰り也、第十二時半頃旭氏来ル、茶出ス、明後十六日オーストリアニ行候旨ニ付、写真致し呉候様頼有之候得共、楼上取散置候故御断、無程帰り、吉五郎第七時頃帰ル来ル、武助午後第七時頃過來ル、同人過日天神辺出火之節来リ候節、不日ニ参リ可居旨申居候得共、眼病故延引致し候旨相断、今日第十二時頃町用掛りより左

之通相認印判致し、早刻御役所へ差出旨申候得共、先生御留主ニ付預リ置、午後第五時頃[印判致し] 町用掛りへ差出ス、[町用掛宛差出文書写]

右文面 七番借地
写真鏡 横山松三郎

一、二階家 拾二坪
一、平屋 拾六坪
右之通相違無御座候也、

西 右
二月 横山松三郎㊟

右之通ニ而二枚差出ス、昨夜内田氏方遺し呉候写真之内[第三十六号]麦・から竹并戸藤細工之写真拾枚、[第九号]漆并同見本之写真八枚借用致ス、午後第七時頃宮下、内田氏へ行、昨夜遺し呉候写真借用之外不残返ス、音無裕山殿方先生へ書状一封来ル、内ニ大山氏へ之書状封込有之、且同人帰国致し候様頼之事申来ル、

「第二月十五日

一、第十二時頃先生、内田氏宅へ御廻リ、夫方事務局へ御出、オーストリア行ノ写真并富岡製糸所之写真、左之書面相添御差出ニ相成、右同時過右写真事務局へ宮下持参ス、右同人事務局方午後第三時前ニ帰ル、先生事務局方外へ御廻リニ相成、同第六時頃御帰り、楠山氏同第五時頃帰宅ス、第十一時過西田耕平殿方郵便来ル、其内ニ蛭子氏へ之書状封込有之、同人江相届呉候旨頼有之候故、即刻上封致し駿河台蛭子氏江郵便ニ致し差出ス、事務局へ差出候請取書文面、

記
六 二

一、金二千三拾三兩二分 オーストリア博覧会行物品
五

写真三百五拾部
但六拾六枚一部
一枚ニ付代銀一朱ツ、

右之通代金御払下ケ被成下置、正奉請取候、以上、
明治六年二月 横山松三郎㊟
内田 九一㊟

博覧会事務局
御役人御中
記

一、金四円 写真ブツク一冊

右之通代金御払下ケ被成下置、正奉請取候、以上、
明治六年二月 横山松三郎㊟
博覧会事務局
御役人御中

(※「方」は平仮名の「よ」と「り」の合字)

(森重和雄)